

雁坂越

幸田露伴

青空文庫

その一

ここは 甲 州 の 笛 吹 川 の 上 流、 東 山 梨 の 釜 和 原 という 村 で、 戸 数 も い く ら も
 無 い 淋 し い と こ ゝ である。 背 後 は 一 帯 の 山 つ づ き で、 ち ょ う ど そ の 峰 通 り は 西 山 梨 と
 の 郡 界 に な っ て い る ほ ど である から、 も ち ゝ ん 樵 夫 や 獵 師 で さ え 踏 み 越 さ ぬ 位 の 仕
 方 の 無 い 勾 配 の 急 な 地 で、 さ て 前 は と い う と、 北 か ら 南 へ と 流 れ て い る 笛 吹 川 の 低 地 を
 越 し て の そ の 対 岸 も ま た 山 々 の 連 続 である。 そ し て こ の 村 か ら 川 上 の 方 を 望 め ば、 い ず
 れ 川 上 の 方 の 事 だ か ら 高 い に は 相 違 ない が、 恐 ろ し い 高 い 山 々 が、 余 り 高 く っ て 天 に 隠
 そ う だ か ら わ ざ と 首 を 縮 め て い る と い う よ う な 恰 好 を し て、 が ん 張 っ て い る 状 態 は、
 あ っ ち の 邦 土 は 誰 に も 見 せ ない と、 意 地 悪 く 通 せん 坊 を し て い る よ う に も 見 え る 位 だ。 そ
 の 恐 ろ し い 山 々 の 一 卜 列 り の む こ う は 武 蔵 の 国 で、 こ っ ち の 甲 斐 の 国 と は、 ま る で 往 来
 さ え 絶 え て い る ほ ど である。 昔 時 は そ れ で も 雁 坂 越 と 云 っ て、 た ま に は そ の 山 を 越 し て 武
 蔵 へ 通 っ た 人 も ある の で、 今 で も 怪 し い 地 図 に 道 路 が ある よ う に 書 い て ある の も ある。 し
 か し こ の 釜 和 原 か ら 川 上 へ 上 っ て 行 く と 下 釜 口、 釜 川、 上 釜 口 と い う と こ ゝ がある

が、それで行止りになつてしまふのだから、それから先はもうどこへも行きようは無いで、川を渡つて東岸に出たところが、やはり川下へ下るか、川浦という村から無理に東の方へ一ト山越して甲州裏街道へと出るかの外には路も無いのだから、今では實際雁坂越の道は無いと云つた方がよいのである。こういうように三方は山で塞がつているが、ただ一方川下の方へと行けば、だんだんに山合が闊くなつて、川が太つて、村々が賑やかになつて、ついに甲州街道へ出て、それから甲斐一国の都会の甲府に行きつくのだ。笛吹川の水が南へ南へと走つて、ここの村々の人が甲府甲府と思つてゐるのも無理は無いのである。

釜和原はこういつたところであるから、言うまでも無く物寂びた地だが、それでも近い村々に比べればまだしもよい方で、前に挙げた川上の二三ヶ村はいうに及ばず、此村から川下に当る数ヶ村も皆この村には勝らないので、此村にはいささかながら物を売る肆も一二軒あれば、物持だと云われている家も二三戸はあるのである。

今この村の入口へ川上の方から来かかった十三ばかりの男の児がある。山間僻地のこころにしてもちと酷過ぎる鍵裂だらけの古布子の、しかもお坊さんご成人と云いたいように裾短で袴短で汚れ腐つたのを素肌に着て、何だか正体の知れぬ丸木の、杖

には長く天秤棒には短いのへ、五合樽の空虚と見えるのを、樹の皮を縄代りにして縛しつけて、それを担いで、夏の炎天ではないからよいようなものの跣足に被り髪——まるで赤く無い金太郎といったような風体で、急足で遣つて来た。

すると路の傍ではあるが、川の方へ「なだれ」になっているところ一体に桑が仕付けてあるその遙に下の方の低いところで、いずれも十三四という女の児が、さすがに辺鄙でも媚き立つ年頃だけに紅いものや青いものが遠くからも見え渡る扮装をして、小籠を片手に、節こそ鄙びてはおれど清らかな高い徹る声で、桑の嫩葉を摘みながら歌を唄っていて、今しも一人が、

わたしあ桑摘む主あ判まんせ、春蚕上簇れば二人着る。

と唱い終ると、また他の一人が声張り上げて、

桑を摘め摘め、爪紅さした花洛女郎衆も、桑を摘め。

と唱つたが、その声は実に前の声にも増して清い澄んだ声で、断えず鳴る笛吹川の川瀬の音をもしばしは人の耳から逐い払つてしまつたほどであつた。

これを聞くとかの急ぎ歩で遣つて来た男の児はたちまち歩みを遅くしてしまつて、声のした方を見ながら、ぶらりぶらりと歩くと、女の児の方では何かに打興じて笑い声を洩らしたが、見る人ありとも心付かぬのであらう、桑の葉越に紅いや青い色をちらつかせながら余念も無しに葉を摘むと見えて、しばしは静であつたが、また前の二人とは違つた声で、

桑は摘みたし梢は高し、

と唄い出したが、この声は前のように無邪気に美しいのでは無かつた。そうするとこれを聞いたこなたの汚い衣服の少年は、その眼鼻立の悪く無い割には無愛想で薄淋しい顔に、いささか冷笑うような笑を現わした。唱の主はこんな事を知ろうようは無いから、すぐと続いて、

誰に負われて摘んで取ろ。

と唄い終つたが、末の摘んで取ろの一句だけにはこちらの少年も声を合わせて弥次馬と出掛けたので、歌の主は吃驚してこちらを透かして視たらしく、やがて笑いを帯びた大きな声で、

「源三さんだよ、憎らしい。」

と誰に云つたのだから分らない語を出しながら、いかにも蓮葉に圃から出離れて、そして振り返つて手招ぎをして、

「源三さんだつて云えば、お浪さん。早く出てお出でなネ。ホホわたし達が居るものだから羞しがって、はにかんでいるの。ホホホ、なおおかしいよこの人は。」

と擲擻つたのは十八九のごとく無く嫌味な女であつた。

源三は一向頓着無く、

「何云つてゐるんだ、世話焼め。」
と口の中で云い棄てて、またさつきと行き過ぎようとする。圃の中からは一番最初の歌の
声が、

「何だネお近さん、源三さんに託けて遊んでサ。わたしやお前はお浪さんの世話を焼かずと用さえすればいいのだあネ。サアこつちへ来てもつとお採りよ。」

と少し叱り氣味で云うと、
「ハイ、ハイ、ご道理さまで。」

と戯れながらお近はまた桑を採りに圃へ入る。それと引違えて徐に現れたのは、紫の糸のたくさんあるごく粗い縞の銘仙の着物に紅氣のかなりある唐縮緬の帯を締めた、源三と同年か一つも上であろうかという可愛らしい小娘である。

源三はすたすたと歩いていたが、ちようどこの時虫が知らせでもしたようにふと振り返って見た。途端に罪の無い笑は二人の面に溢れて、そして娘の歩は少し疾くなり、源三の歩は大に遅くなつた。で、やがて娘は路——路といつても人の足の踏む分だけを残して両方からは小草が埋めている糸筋ほどの路へ出て、その狭い路を源三と一緒に仲好く肩を駢べて去つた。その時やや隔たつた圃の中からまた起つた歌の声は、

わたしあ桑摘む主あ判まんせ、春蚕上簇れば二人着る。

という文句を追いかけるように二人の耳へ送った。それは疑いも無くお近の声で、わざと二人に聞かせるつもりで唱ったらしかった。

その二

「よつぽど此村へは来なかつたネ。」
と、浅く日の射している高い椽側に身を靠せて話しているのはお浪で、此家はお浪の家なのである。お浪の家は村で指折の財産よしであるが、不幸に家族が少くつて今ではお浪とその母とばかりになっているので、召使も居れば傭の男、女も出入りするから朝夕などは賑かであるが、昼はそれぞれ働きに出してあるので、お浪の母が残っているばかりで至って閑寂である。特に今、母はお浪の源三を連れて帰つて来たのを見て、わたしはちよいと見廻つて来るからと云つて、少し離れたところに建ててある養蚕所を監視に出て行つたので、この広い家に年のいかないもの二人限であるが、そこは巡査さんも月に何度かしか回つて来ないほどの山間の片田舎だけに長閑なもので、二人は何の気も無く遊んでいるのである。が、上れとも云わなければ茶一つ出そうともしない代

り、自分も付合つて家へ上りもしないでいるのは、一つはお浪の心安立こころやすだてからでもあるうが、やはりまだ大人おとなびぬ田舎娘の素樸きじなところからであろう。

源三の方は道を歩いて来たためにちと脚あしが草臥くたびれているからか、腰こしを掛けるには少し高過ぎる椽のの上へ無理に腰を載せて、それがために地に届かない両脚をぶらぶらと動かしながら、ちようどその下の日当りに寐ねている大おおき白犬の頭を、ちよつと踏んで軽く蹴けるように触さわつて見たりしている。日の光はちようど二人の胸あたりから下の方に当っているが、日ざしに近くいるせいだか二人とも顔が薄うすりと紅くなつて、特に源三は美しく見える。

「よつぽどつて、そうさ五日いつかむいか六日来なかつたばかりだ。」

と源三はお浪の言葉に穩おだやかに答えた。

「そんなものだつたかね、何だか大変長い間見えなかつたように思つたよ。そして今日きょうはまた定きまりのお酒買いかネ。」

「ああそうさ、厭いやになつちまうよ。五六日は身体からだが悪いつて癩かんしゃく癩かんしゃくばかり起してネ、おいらを打ぶつたり擲たたりした代りにやあ酒買いのお使いはせずに済すんだが、もう癒なおつたらまた今日きょうつからは毎日だろう。それもいいけれど、片道一里もあるところをたつた二合ごうずつ買よこいに遣よこされて、そして氣むずかしい日にあ、こんなに量りが悪いはずはねえ、大おおか

方途^{たとちゆう}中で飲^のんだろう、道理で顔が赤いようだなんて無理を云つて打撲^{ぶんなぐ}るんだもの、ほんとに口措^{くやし}くつてなりやしない。」

「ほんとに嫌^{いや}な人だつちやない。あら、お前の頸^{くび}のところに細長い痣^{あざ}がついているよ。いっつ打^ぶたれたのだい、痛そうだねえ。」

と云いながら傍^{そば}へ寄つて、源三の衣領^{えりくつろ}を寛^きげて奇麗^{きれ}な指で触つてみると、源三はくすぐつたいと云つたように頸^くを縮^{すく}めて障^{さへぎ}りながら、

「お止^{よし}よ。今じやあ痛くもなんともないが、打たれた時にあ痛かつたよ。だつて布袋竹^{ほていちく}の釣竿^{つりざお}のよく撓^{しな}う奴^{やつ}でもつてピューツと一ツやられたのだもの。一昨^{さきおととい}々日^じのことだつたがね、生^{なま}の魚が食べたいから釣つて来いと命令^{いらいつ}けられたのだよ。風が吹^ふいて騒^{さわ}ついた厭^{いや}な日^ひだつたもの、釣れないだろうとは思つたがね、愚^ぐ図^ず愚^ぐ図^ずしていると叱^{しか}られるから、ハイと云つて釣には出たけれども、どうしたつて日が悪いのだもの、釣れやしないのさ。夕方まで骨を折つて、足の裏が痛くなるほど川ん中をあつちへ行つたりこつちへ行つたりしたけれども、とうとう一尾^{いっぴき}も釣れずに家へ帰ると、サア怒^{おこ}られた怒^{おこ}られた、こん畜生^{ちくしよう}こん畜生と百ばかりも怒鳴^{どな}られて、香魚^{あゆ}や山鯨^{やまめ}は釣れないにしても雑魚^{ざこ}位釣れない奴があるものか、大方遊んでばかりいやがつたのだらう、この食^くい潰^{つぶ}し野郎^{やろう}めッてえんでもつて、

釣竿を引奪られて、逃げるところを斜に打たれたんだ。切られたかと思つたほど痛かつたが、それでも夢中になつて逃げ出すとネ、ちようど叔父さんが帰つて来たので、それで済んでしまつたよ。そうすると後で叔父さんに対つて、源三はほんとに可愛い児ですよ、わたしが血の道で口が不味くつてお飯が食べられないつて云いましたらネ、何か魚でも釣つて来てお菜にしてあげましょうつて今まで掛けて釣をしていましたよ、運が悪くつて一尾も釣れなかつたけれども、ときもさも自分がおいらによく思われていでもするように云うのだもの、憎くつて憎くつてなりあしなかつた。それもいいけれど、何ぞというとい潰しつて云われるなあ腹が立つよ。過日長六爺に聞いたたら、おいらの山を何町歩とか叔父さんが預かつて持つているはずだつていうんだもの、それじゃあおいらは食潰しの事は有りあししないじゃあないか。家の用だつて随分たんとしてゐるのに、口穢く云われるのが真実に厭だよ。おまえの母さんはおいらが甲府へ逃げてしまつて奉公しようというのを止めてくれたけれども、真実に余所へ出て奉公した方がいくらかい知れやしない。ああ家に居たくない、居たくない。」

と云いながら、雲は無いがなんとなく不透明な白みを持つてゐる柔和な青い色の天を、じーつと眺め詰めた。お浪もこの夙く父母を失つた不幸の児が酷い叔母に窘められる談

を前々から聞いて知っている上に、しかも今のような話を聞いたのでいささか涙ぐんで茫然として、何も無い地の上に眼を注いで身動もしないでいた。陽気な陽気な時節ではあるがちよつとの間はしーんと静になつて、庭の隅の柘榴の樹の周りに大きな熊蜂がぶーんと羽音をさせているのが耳に立つた。

その三

色々な考えに小な心を今さら新に紛れさせながら、眼ばかりは見るものの当も無い天をじつと見ていた源三は、ふつと何の禽だか分らない禽の、姿も見えるか見えないか位に高く高く飛んで行くのを見つけて、全くお浪に対つてでは無い語気で、

「禽は好いなア。」

と呻き出した。

「エツ。」

と言いながら眼を挙げて源三が眼の行く方を見て、同じく禽の飛ぶのを見たお浪は、たちまちにその意を悟つて、耐えられなくなつたか泫然として涙を墮した。そして源三が肩

先たさきを把とらえて、

「またおまえは甲府へ行つてしまおうと思つてゐるね。」

とさも恨うらめしように、しかも少しそうはさせませぬという圧制あつせいの意いの籠こもつたような語ことばの調子で言つた。

源三はいささかたじろいだ氣味で、

「なあに、無暗むやみに駈かけ出して甲府へ行つたつていけないということとは、お前の母おつかさん様の談はなしでよく解わかつてゐるから、そんな事は思つてはいないけれど、余あんまり家に居て食い潰つぶし食くひ潰つぶしつて云われるのが口惜くやしいから、叔父さんにあ濟まないとどこへでも出て、どんな辛い思つらいをしてしても辛棒しんぼうをして、すこしでもいいから出世したいや。弱虫だ弱虫だつて衆みんなが云うけれど、おいらだつて男の兒だもの、窘いじめられてばかりいたかあ無いや。」

と他の意ひとこのさかに逆さからわぬような優しい語氣ではあるが、微塵みじんも偽いつわり氣げは無ない調子で、しみじみと心うちの中を語つた。

そこで互たがいに親おやみ合つてはいても互こころに意むきの方向ちがの異ちがつてゐる二人の間に、たちまち一条の問答が始まつた。

「どこへでも出て辛棒をするつて、それじゃあやつぱり甲府へ出ようつて云うんじゃあな

いか。」

とお浪は云い切つて、しばし黙つて源三の顔を見ていたが、源三が何とも答えないのを見て、

「それご覧、やつぱりそうしようと思つておいでのだろう。それあおまえも、品質が好いからつて二合ばかりずつのお酒をその度々に釜川から一里もあるこの釜和原まで買ひに遣すような酷い叔母様に使われて、そうして釣竿で打たれるなんて目に逢うのだから、辛いことも辛いだろうし口惜しいことも口惜しいだろうが、先日のように逃げ出そうと思つたりなんぞはしちやあ厭だよ。ほんとに先日之夜だつて吃驚したよ。いくら叔母さんが苛いつたつて雪の降つてる中を無暗に逃げ出して来て、わたしの家へも知らさないで、甲府へ出てしまつて奉公しようと思つとつて、夜にもなつてゐるのにそつと此村を通り抜けてしまおうとしたじゃあないか。吾家の母さんが与惣次さんところへ招ばれて行つた歸路のところへちやうどおまえが衝突つたので、すぐに見つけられて止められたのだが、後で母様のお話にあ、いくら下りだつて甲府までは十里近くもある路を、夜にかかつて食物の準備も無いのに、足ごしらえも無しで雪の中を行こうとは怜悧のようでも眞実に兎童だ、わたしが行き合つて止めでもしなかつたらどんな事になったか知れやしない、思い

出しておそろも怖い事だと仰おつしやつたよ。そればかりじゃあ無い、奉公をしようと云つたつて請う人けにんというものが無けりやあ堅かたい良い家うちじやあ置いてくれやしないし、他人ばかりの中へ出りやあ、この児はこういう訳のものだから 慇かわいそう然だと思つてくれる人だつて有りやあしない。だから他郷よそへ出て苦勞をするにしても、それその道順を踏ふまなければ、ただあつちこつちでこづき廻まわされて無駄むだに苦しい思おもいをするばかり、そのうちにあ碌ろくで無い智慧ちえの方が付きがちのものだから、まあまあ無暗に広い世間へ出たつて好いことは無い、源さんも辛いだろうがもう少し辛棒しんぼうしていてくれれば、そのうちにあどうかしてあげるつもりだと吾家うち おつかの母さんがお話したつた事は、あの時の後にもわたしが話したからおまえだつて知りきつてゐるはずじゃあ無いかエ。それだのにまだおまえは隙すきさえありやあ無鉄砲むてつぱうなことをしようと思ひのかエ。」

と年齢としは同じほども女だけにませたことを云つたが、その言葉の端々はしはしにもこの女の怜これで、そしてこの児を育ててゐる母の、分別かしこの賢い女であるということも現れた。

源三は首を垂たれて聞いていたが、

「あの時は夢中になつてしまつたのだもの、そしてあの時おまえの母様おつかさんにいろんな事を云つて聞かされたから、それからは無暗の事なんかしようとは思つてやしないのだヨ。

だけれどもネ、」

と云いさして云い^{よど}澱んでしまった。

「だけれどもどうしたんだエ。ああやつぱり^{うち}吾家の^{おっかさん}母様の云うことなんか聴^きかないつもりなのだネ。」

「なあに、なあにそうじやないけれども、……」

「それ、お見、そうじやあないけれどもつてお云いでも、後の語^{ことば}は出ないじやあないか。」

「……………」

「ほら、ほら、聞^{つか}えてしまつて云えないじやあないか。おまえはわたし達にあ秘^{かく}していても腹^{おなか}ん中じやあ、いつか一度は、誰の世話にもならないで一人で立派なものになろうと思つてゐるのだネ。イイエ頭^ふを掉つてもそうなんだよ。」

「ほんとにそうじやないつて云うのに。」

「イイエ、何と云つてもいけないよ。わたしはチャー^おンと知つてゐるよ。それじやあおまえあんまりというものだよ、何もわたし達あおまえの叔母^{おば}さんに告^{いっけぐち}口でもしやしまし、そんなに秘^{かく}し立^{だて}をしなくつてもいいじやあないか。先の内^{せん}はこんなおまえじやあなかつたけれどだんだんに酷い人におなりだネエ、黙^{だんまり}々で自分の思い通^{おしとお}りを押通そうとお

思いのだもの、ほんとにおまえは人が悪い、怖こわいような人におなりだよ。でもおあいにくさまだが吾家うちの母おつかさん様はおまえの心持を見通していらして、いろいろな人にそう云つておおきになつてあるから、いくらお前が甲府の方へ出ようと思つたりなんぞしてもそうはいきません。おまえの居る方から甲府の方へは笛吹川の兩岸のほかには路は無い、その路にはおまえに無暗なことをさせないようにと思つて見ている人が一人や二人じゃ無いから、おまえの思うようにあなりあしないヨ。これほどに吾家うちの母おつかさん様の為なさるのも、おまえのためにいいようにと思つていらつしやるからだとお話があつたわ。それなのに禽とりを見て独ひとりごと語を云つたりなんぞして、あんまりだよ。」

と捲まくし立ててなおお浪の言わんとするを抑おさえつけて、

「いいよ、そんなに云わなくつたつて分つているよ。おいらあ無暗に逃げ出したりなんぞしようと思つてやしないというのに。」

と遮さえぎる。

「おや、まだ強ごうじよう情に虚言うそをお吐きだよ。それほど分つているならなぜ禽うはいいなあと云つたり、だけれどもネと云つて後の言葉を云えなかつたりするのだエ。」

と追ついきゆう窮する。追窮くわしされても窘くわしまぬ源三は、

「そりやあただおいらあ、自由自在になつていたら嬉しいだろうと思つたからそう云つたのさ。浪ちゃんだつてあの禽のように自由だつたら嬉しいだろうじゃあないか。」

と云うと、お浪はまた新に涙ぐんで其言には答えず、

「それ、その通りだもの。おまえにやまだ吾家の母さんだのわたしだのが、どんなにおま

えのために思つてゐるかが解らないのかネエ。真実におまえは自分勝手ばかり考へていて、

他の親切というものは無にしても関わないというのだネ。おおかたわたし達も誰も居なかつたら自由自在だつておまえはお悦びだろうが、あんまりそりやあ氣随過ぎるよ。吾家の

母様もおまえのことには大層心配をしていらして、もう少しするとおまえのところの

叔父さんにちゃんと談をなすつて、何でもおまえのために悪くないようにしてあげようつ

て云つていらつしやるのだから、辛いだろうがそんな心持を出さないで、少しの間辛抱お

しでなくちやあ濟まないわ。」

としみじみと云うその真情に誘ひ込まれて、源三もホロリとはなりながらなお、

「だつて、おいらあ男の児だもの、やつぱり一人で出世したいや。」

と自分の思わくとお浪の思わくとの異つてゐるのを悲む色を面に現しつゝ、正直にしかも

剛情に云つた。その面貌はまるで小児らしいところの無い、大人びきつた寂びきつ

つた。その面貌はまるで小児らしいところの無い、大人びきつた寂びきつ

たものであった。

お浪はこの自己おのれを恃たのむ心のみ強い言ことばを聞いて、驚おどろいて目を瞠みはつて、

「一人でつて、どう一人でもつて？」

と問い返したが返辞が無かったので、すぐとまた、

「じゃあ誰の世話にもならないでというんだネ。」

と質ただすと、源三は術無じゆなそうに、かつは憐愍あわれみと宥恕ゆるしとを乞こうような面かおをして微かすかに点頭うなずいた。

源三の腹の中は秘かくしきれなくなつて、ここに至つてその継子根性ままここんじようの本相ほんしようを現して

しまった。しかし腹の底にはこういう僻みひがを持つていても、人の好意に負そむくことは甚ひどく心

苦しく思っているのだ。これはこの源三が優しい性うまれつき質の一角と云おうか、いやこれが

この源三の本来の美しい性質で、いかなる人をも頼たのむまいというようなのはかえつて源三

が性質の中のある一角が、境遇きようぐうのために激げきせられて他の部よりも比較ひかくてき的に発展した

ものであらうか。

お浪は今明らかに源三の本心を読んで取つたので、これほどに思っている自分親子をも胸おくの奥の奥では袖そでにしている源三のその心強さが怨うらめしくもあり、また自分が源三に隔へだてがましく思われているのが悲しくもありするところから、悲痛の色を眉目びもくの間に浮うかめて、

「じゃあ吾家うちの母おつかさん様の世話にもなるまいというつもりかエ。まあ怖い心持におなりだネエ、そんなに強きつくならないでもよさそうなものを。そんなおまえじゃあ甲府の方へは出すまいとわたし達がしていても、雁坂を越えて東京へも行きかねはしない、吃驚びっくりするほどの意地っ張りにおなりだから。」

と云った。すると源三はこれを聞いて愕然ぎよつとして、秘せぬ不安の色をおのずから見せた。というものは、お浪が云った語ことばは偶然ぐうぜんであつたのだが、源三は甲府へ逃げ出そうとして意を遂げなかつた後、恐ろしい雁坂を越えて東京の方へ出ようと試みたことが、既すでに一度で無く二度までもあつたからで、それをお浪が知つていようはずは無いが、雁坂を越えて云々と云い中あてられたので、突然いきなりに鋭い矢を胸の真正中に射込まれたような気がして驚いたのである。

源三がお浪にもお浪の母にも知らせない位であるから無論誰にも知らせないで、自分一人ひとで懐いだいている秘密ひみつはこうである。一体源三は父母を失つてから、叔母が片付えんいている縁えんによつて今の家に厄介やつかいになつたので、もちろん厄介と云つても幾許いくばくかの財産をも預けて寄食していたのだからまるで厄介になつたという訳では無いので、そこで叔母にも可愛がらるればしたがって叔父にも可愛がられていたところ、不幸にしてその叔母が病気で死

んでしもうて、やがて叔父がどこからか連れて来たのが今の叔母で、叔父は相変らず源三を愛しているにかかわらず、この叔父の後妻はどういうものか源三をいじ窘めること非常なので、源三はついに甲府へ逃にげて奉公しようと、山奥の児童こどもにも似合わない賢かしこいことを考え出して、既にかつて堪たえられぬ虐遇ぎやくぐうを被こうむった時、夢中になつて走り出したのである。ところが源三と小学からの仲好なかよし朋友ともだちであつたお浪の母は、源三の亡くなつた叔母と姉妹きようだ同様の交情なかであつたので、我が親かつたものの甥おいでしかも我が娘の仲好しである源三が、始終履歴りれきの汚れ臭い女に酷ひどい目に合わされているのを見て同情おもうに堪たえずにいた上、ちやうど無暗滅法むやみめつぽうに浮世うきよの渦うずの中へ飛込もうという源三に出会つたので、取りあえずその可哀あわれな境遇ききうを氣きの毒どくと思うのとのために、これもまたいろいろに親切にしてやる。これらの事情の湊合そつごうのために、源三は自分の唯一ゆいいつの良案と信じている「甲府へ出て奉公住みする」という事をあえてしにくいので、自分が一刻も早く面白くない家を出てしまつて世間へ飛び出したいという意いからは、お浪親子の親切を嬉しいとは思ひながら難有ありがためい迷惑わくに思う氣味もあるほどである。もちろんお浪親子がいかに一本路を見張つてゐるに

しても、その眼めを潜くぐつて甲府へ出ることはそれほど難しいことでは無いが、元は優しいので弱虫弱虫と他の児ほか童等こどもたちに云われたほどの源三には、その親切なお浪親子の家の傍を通つてその二人を出だし抜ぬくことが出来ないのであつた。しかし家に居たく無い、出世がしたい、奉公に出たらよかろうと思わずにはいられない自分の身の上の事情は継けい続ぞくしているので、小耳はさに挟さんだ人の談話はなしからついに雁坂を越えて東京へ出ようという心が着いた。

東京は甲府よりは無論佳よいところである。雁坂を越して峠とうげ向うの水に随ついてどこまでも下れば、その川は東京の中を流れている墨田川すみだがわという川になる川だから自然と東京へ行つてしまふということ聞きかじつていたので、何でも彼嶺あれさえ越せばと思つて、前の月のある朝ひ酷どく折せ檻かんされたあげくに、ただ一人思い切つて上りかけたのであつた。けれどもそこは小児こどもの思かん慮がえも足らなければ意地も弱いので、食物を用意しなかつたため絶頂までの半分も行かぬ中に腹は減へつて来る気は萎なえて来る、路はもとより人跡じんせき絶えているところを大おお概おその「勘かん」で歩くのであるから、忍耐がまんに忍耐がまんしきれなくなつて怖こわくもなつて来れば悲しくもなつて来る、とうとう眼を凹くぼませて死にそうになつて家へ歸つて、物置すみの隅で人知れず三時間も寐ねてその疲つか勞れを癒いしたのであつた。そこでその四五日は雁坂の山を望んでは、ああとてもあの山は越えられぬと肚はらの中で悲しみかえつていたが、一度その意こころを

起したので日数の立つ中にはだんだんと人の談話や何かが耳に止まるため、次第次第に雁坂を越えるについての知識を拾い得た。そうするとまたそろそろと勇氣が出て来て、家を出てから一里足らずは笛吹川の川添を上つて、それから右手の嶺通りの腰をだんだんと「なぞえ」に上りければ、そこが甲州武州の境で、それから東北へと走つていゝる嶺を伝わつて下つて行けば、ついには一つの流に会う、その流に沿うて行けば大滝村、それまでは六里余り無人の地だが、それからは盲目でも行かれる楽な道だそうだ、何でも峠さえ越してしまえば、と朝晩雁坂の山を望んでは、そのむこうに極樂でもあるように好ましげに見ていた。

すると叔父は山持ぎをするものの常で二三日帰らなかつたある夜の事であつた。叔母の肩をば揉んでいる中、夜も大分に更けて来たので、源三がつい浮りとして居睡ると、さあ恐ろしい煙管の打擲を受けさせられた。そこでまた思い切つてその翌朝、今度は団飯もたくさんに用意する、錢も少しばかりずつ何ぞの折々に叔父に貰つたのを溜めておいたのをひそかに取り出す、足ごしらえも嚴重にする、すっかり仕度をしてしまつて釜川を背後に、ずんずんずんと川上に上つた。やがて小一里も来たところで、さあここから川の流れに分れて、もう今まで昼となく夜となく眠にしたり耳にしたりしていた笛吹川

もこれが見納めとしなければならぬという場所にかかった。そこで歳こそ往かないが源三
 もなんとなく心淋しいような感じがするので、川の側の岩の上にしばし休んで、鞆と
 流れる水のありさまを見ながら、名づけようを知らぬ一種の想念に心を満たしていた。そ
 うするといずくからともなく人声が聞えるようなので、もとより人も通わぬこんなところ
 で人声を聞こうとも思いがけなかった源三は、一度は愕然として驚いたが耳を澄まして
 聞いていると、上の方からだんだんと近づいて来るその話声は、復び思いがけ無くもたし
 かに叔父の声音だった。そこで源三は川から二三間離れた大きな岩のわずかに裂け開けて
 いるその間に身を隠して、見咎められまいと潜んでいると、ちやうど前に我が休んだあた
 りのところへ腰を下して憩んだらしくて、そして話をしているのは全く叔父で、それに応
 答えをしているのは平生叔父の手下になつては持ぐ甲助という村の者だった。川音と
 話声と混るので甚く聞き辛くはあるが、話の中に自分の名が聞えたので、おのずと聞き逸
 すまいと思つて耳を立てて聞くと、「なあ甲助、どうせ養子をするほどでもない財産だか
 ら、鼻が勧める鼻の甥なんその気心も知れねえ奴を入れるよりは、怜悧で天賦の良いの
 源三におらが有つたものは不残遣るつもりだ。そうしたらあいつの事だから、まさかおら
 が亡くなつたつておらの墓を草の中に転げさせてしまひもすめえと思うのさ。前の鼻にこ

そ血筋ちすじは引け、おらには縁の何も無いが、おらあ源三が可愛くつて、家へ帰るとあいつめが叔父さん叔父さんと云いやがつて、草鞋わらじを解といてくれたり足の泥どろを洗とってくれたり何やかやと世話を焼いてくれるのが嬉しくてならない。子という者あ持ったことも無いが、まあ子も同様に思っているのさ。そこでおらあ、今はもう持がないでも食つて行かれるだけのことは有るが、まだ仕合しあわせに足腰も達者だから、五十と声がかかっちゃあ身体からだは太義たいぎだが、こうして持いで山林方やまかたを働はたらいている、これも皆少みなせうでも延ばしておいて、源三めに与やつて喜ばせようと思うからさ。どれどれ今日は三四日ぶりで家へ帰つて、叔父さん叔父さんてあいつめが莞爾にこつく顔を見よう、さあ、もう一服やったら出掛けようぜ」と高たか話はなしして、やがて去つた。これを聞いていた源三はしくしくしくと泣き出したが、程立ほどたつて力無なみだげに悄しよんぼり然ふつとと岩の間から出て、流しよの下の方をじつと視みていたが、堰せきあえぬ涙なみだを払はらつた手の甲ふつとを偶然見ると、ここには昨夜ゆうべの煙管あとの痕いんいんが隠ひそ々と青く現れていた。それが眼に入るか入らぬに屹きつと頭かしらを擡あげた源三は、白い横長い雲がかかっている雁坂にらの山を睨にらんで、つかつかと山手の方へ上りかけた。しかしたちまちにして一ト歩あしは一ト歩より遅おそくなつて、やがて立止たまりまつたかと思えるばかりに緩のろく緩のろくなつたあげく、うっかりとして脱ぬけ石いしに爪つ端まさきを踏掛ふんがけけたので、ずるりと滑すべる、よろよろツと踉蹌よろける、ハツと思う間も無くクルリ

と転まわつてバタリと倒れたが、すぐには起きも上り得ないでまず地つちに手てを突ついて上半身を起して、見ると我が村の方はちようど我が眼の前に在った。すると源三は何を感じたか滝たきのごとくに涙なみだを墜おとして、ついには噉すすり泣なきして止やまなかつたが、泣いて泣いて泣き尽つくした果はてに竜鍾しおしおと立上つて、背中に付けていた大な団飯おおきむすびを抛ほうり捨ててしまつて、吾家わがやを指して立歸つた。そして自分の出来るだけ忠実まめやかに働いて、叔父が我が拳動しうちを悦よろこんでくれるのを見て自分も心から喜ぶ余りに、叔母の酷むじさをさえ忘れるほどであつた。それで二度までも雁坂越かりをしようとした事はあつたのであるが、今日まで噫おくびにも出さずにいたのであつた。

ただよく愛するものは、ただよく解するものである。源三が懐いだいているこういう秘密を誰から聞いて知ろうようも無いのであるが、お浪は偶然にも云あい中なてたのである。しかし源三は我が秘密はあくまでも秘密として保つて、お浪との会話はなしをいい程ほどのところに遮さへぎり、余り帰宅かえりが遅おそくなつてはまた叱なられるからという口実さかやのもとに、酒店へと急いで酒を買い、なお村の尽頭はすれまで連れ立つて来たお浪に別れて我が村へと飛ぶがごとくに走り歸つた。

その四

ちようどその日は樽たるの代り目で、前の樽の口のと異ちがつた品ではあるが、同じ価ねの、同じ土地で出来た、しかも質ものは少し佳よい位のものであるという酒店さかやの挨拶あいさつを聞いて、もしや叱責こごの種子たねにはなるまいかと鬼胎おそれを抱いだくこと大方ならず、かつまた塩文しおとびを買かつて来いという命令いひつけではあつたが、それが無かつたのでその代りとして勧められた塩鯖しおさばを買かつたについて一ト方ならぬ鬼胎おそれを抱いだいた源三は、びくびくもので家の敷居しきいを跨またいでこの経由わけを話すと、叔母の顔は見る見る恐ろしくなつて、その塩鯖の※包みかわづつを手にするや否いなやそれでもつて散々さんざんに源三を打ぶつた。

何で打たれても打たれて佳いというものがあるはずは無いが、火を見ぬ塩魚しおうぎの悪わる腥なまぐさい——まして山里の日増しものの塩鯖の腐くさりかかつたような——奴やつの※包みで、力任せに眼とも云わず鼻とも云わず打たれるのだから堪こたえられた訳のものでは無い。まず※は幾たけのかれくす条じにも割われ裂さける、それでもつて打たれるので※の裂目のひりひりしたところが烈はげしく触さるから、ごくごく浅い疵きずではあるが松葉まつばでも散らしたように微かすりきず疵きずが顔へつく。そこへ塩氣しおけがつく、腥なまぐさ氣がつく、魚肉にくが迸裂はげて飛んで額ひたい際ぎわにへばり着いているという始末、いやはや眼も当てられない可厭いやな窘めいじようで、叔母のする事はまるで狂氣きちがいだ。もちろん源三は先妻の縁引きで、しかも主人あるじに甚ひどく氣に入いつていて、それがために自分がこ

こへ養子に入れて、生活状態くらしざまの割には山林やまやなんぞの資産の多いのを譲り受けさせようと思つてゐる我が甥がここへ入れないのであるから、憎いにはあくまで憎いであらうが、一つはこの女の性質が残忍ざんにんなせいでもあるうか、またあるいは多くの男に接したりなんぞして自然の法則を蔑視べつしした婦人等おんなたちは、ややもすれば年老としおいて女の役の無くなる頃ころに臨のぞむと奇妙きみょうにも心状こころが焦躁じれたり苛酷いらひどくなつたりしたがるものであるから、この女もまたそれ等らの時に臨んでいたせいででもあらうか、いかに源三のした事が氣に入らないにせよ、随分尋常外ずいぶんなみはずれた責めかたである。

最初は仕方が無いと諦めて打たれた。二度目は情無いと思ひながら打たれた。三度目四度目になれば、口惜しいと思ひながら打たれた。それから先はもう死んだ氣になつてしまつて打たれてゐたが、余りいつまでも打たれてゐる中に障さきえることの出来ない怒いかりが勃然ぼつぜんとして骨々ほねほね節々ふしふしの中から起つて來たので、もうこれまでと源三は抵抗ていこうしようとしかけた時、自分の氣息いきが切れたと見えて叔母は突き放つて免ゆるした。そこで源三は抵抗もせず、我を忘れて退いて平伏ひれふしたが、もう死んだ氣どころでは無い、ほとんど全く死んでいて、眼には涙も持たずにいた。

その夜源三は眠りかねたが、それでも少年の罪の無さには暁天方あかつきがたになつてトロリとし

た。さて目※む間も無く朝早く目が覚めると、平生の通り朝食の仕度にと掛ったが、その間々ひまひまにそろりそろりと雁坂越の準備をはじめて、重たいほどに腫れた我が顔の心地悪しさを苦にせず、団飯むすびから脚あしごしらえの仕度まですっかりして後、叔母にも朝食をさせ、自分も十分に喫し、それから隙を見て飄然と出てしまった。

家を出て二三町歩いてから持つて出た脚絆きやはんを締め、団飯むすびの風呂敷包みをおのが手作りの穿替はきかえの草鞋わらじと共に頸くびにかけて背負い、腰の周囲まわりを軽くして、一ト筋の手拭てぬぐいは左の手首に縛しつけ、内懐うちぶとこにはお浪にかつてもらった木綿財布もめんざいふに、いろいろの交り銭まじぜにの一円少し余よを入れたのを確しかと納め、両の手は全空まるあきにしておいて、さして柴刈鎌しばかりがまの柄えの小長い奴を右手に持ったり左手に持ったりしながら、だんだんと川上へ登り詰めた。

やがて前さきの日叔父ことばの言を聞いて引返したところへかかると、源三の歩みはまた遅くなった。しかし今度は、前さきの日自分が腰掛けた岩としばらく隠れた大な岩おおきとをやや久しく見ていたが、そのあげくに突然と声張り上げて、ちとおかしな調子で、「我は官軍、我が敵は」と叫さけび出して山手へと進んだ。山鳴り谷答えて、いずくにか潜ひそんでいる悪魔あくまでも唱い返したように、「我は官軍我敵は」という歌の声は、笛吹川の水音にも紛まぎれずに聞えた。

それから源三はいよいよ分り難い山また山の中に入つて行つたが、さすがは山里で人
 なつただけにどうやらこうやら「勘」を付けて上つて、とうとう雁坂峠の絶頂へ出て、そ
 して遙に遠く武蔵一國が我が脚下に開けているのを見ながら、蓬々と吹く天の風が頬
 被りした手拭に当るのを味つた時は、躍り上り躍り上つて悦んだ。しかしまた振り返つ
 て自分等が住んでいた甲斐の國の笛吹川に添う一帯の地を望んでは、黯然としても心も
 味くなるような氣持がして、しかもその薄すりと霞んだ霞の底から、

桑を摘め摘め、爪紅さした、花洛女郎衆も、桑を摘め。

と清い清い澄み徹るような声で唱い出されたのが聞えた。もとより聞えるはずが有ろう訳
 は無いのであるが。

(明治三十六年五月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「露伴全集」岩波書店

※底本の「小書き片仮名ト」（JIS X 0213、1-6-81）は、「ト」に置き換えました。但し「トリ」（底本78ページ4行）の「ト」を除きます。

※本作品中には、今日では差別的表現として受け取れる用語が使用されています。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、あえて発表時のままとしました。（青空文庫）

入力：kompass

校正：林 幸雄

2001年10月2日公開

2003年11月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雁坂越

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>